

INFORMATION

4月24日（日）
13時から14時
徳泉寺本堂及び墓地
勤行・法話・焼香

二年ほど、延期で開催できなかった春の法要を上を通り勤修いたします。共同墓地、ペット墓地にご縁ある方に限らず、ただでもお参りできますのでぜひご参会ください。
万が一緊急事態宣言等が発令された場合は秋彼岸に延期とします。その場合はホームページ等でお知らせしますがご心配な方はお問い合わせください。

今月のことば

本当に
自分を知るには
やはり
人という鏡が
なくてはならない
高光大船

金沢の僧侶、高光大船さんの言葉です。私たちは人との関わり、かけあう言葉や態度を通して、自分の姿にであって行く。それは自分自身では見えない姿を見せてくれる鏡のような存在なのかもしれません。

どなたでもご参加できます。真宗の教えに触れてみませんか。

四月同朋会

四月九日(第二土曜日)

十二時から十五時

徳泉寺本堂

勤行・前任職・住職 法話



『徳泉寺報』後記
もうすぐ桜が咲きます。徳泉寺の桜を楽しみに待っていてくださる方々が「桜はまだですか？」と訪ねてくださいます。いろんなことがあるからなおさら桜が咲くのがとても楽しみです。

前任職法話「忘れること勿れ」

東日本大震災から十一年が経ちました。こうして鐘を撞き、法要を行うというこの意味とは、あの震災で感じたことを掘り起こし、これからの生きる指針にしていくということではないかと思えます。

あの一つの地震で二万人近い人の命が奪われました。私はあの時「いのち」ということについて突き付けられた気がします。「いのち」とは「いつ」「どこで」「どんな形で」終わるか分からない。そして、誰とも替わることができないたった一つの尊い「いのち」ということです。お孫さんと手を繋いで必死に逃げていたお祖母さんが「気づいたら孫の手が離れていた。若い先短い自分の命と孫の命を取り替えたい。」とテレビで涙ながらに話しておられました。そんな願っても誰とも替わることができない、当たり前ではない、奇跡的に今を生きているのが私たちの「いのち」なのです。京都大学の田中三知太郎先生に「死の自覚が生への愛だ」という言葉があります。自分の死を自覚したとき、どう生きるかが必然的に私の課題になってくるということがあるのだと、心の底から感じました。

もう一つ私を感じたことは「モノもコトもあつて当たり前ということ一つもない」ということです。「当たり前」の反対は「有り難い」だと言いますが、あの時はいくらお金があつてもモノがない。何時間も並んでやつと買ったものをお寺におすす分けしてくださる方もいらつしやつて本当に有り難かつたのを今でも覚えていますが、同時に人間は人と人の「間」を生きる関係存在だということにも気づかされました。自分は一人生きている、と言つても今着ている服も、食べている食事も材料を取つたり作つたりした人がいて、それを商品にして売る人がいて、調理する人がいて初めて私の手に渡る。人はひとりでは決して生きられない。人と人の間にあつて生かされている存在なのです。